

日中養蚕文化に関する比較研究

—保護と伝承を中心に—

(要約)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D173595

氏名：羅石巧

本論文は、日中両国の各時代における社会背景、養蚕業の発展、生産規模、技術水準および経済的地位、両国で養蚕文化が誕生した背景を整理すると同時に、両国の養蚕業の発展過程における関連性、相互作用を明らかにした。また両国の蚕神、養蚕関連の年中行事と芸能の比較分析を通じて、両国の養蚕民俗の相違点を明らかにし、その原因を分析して両国の養蚕文化に内在する関連性を探究してきた。さらに養蚕関係の博物館、文化財、学校の「蚕の学習活動」を調査対象として養蚕文化の保護と伝承に関する両国の取り組みを比較研究し、その成果をまとめ、課題を発見し、実行性のある対策を探究したことで、両国の養蚕文化の保護と伝承に対して建設的な提言を行った。

第1章では、「日中における養蚕の歴史」について論じた。第1節では、伝説を中心に中国の養蚕の起源について考察を行った。第2節では、古代中国における養蚕の発展状況と養蚕の日本への伝播を考察した。第3節では、近世から19世紀末期までの日中における養蚕業の展開状況について比較分析した。第4節では、20世紀初期から終戦までの日中の養蚕業発展状況について考察を行った。第5節では、終戦から現在までの日中における養蚕業の発展状況を比較分析した。

第2章では、「日中の養蚕民俗」について論じた。第1節では、日中の蚕神について考察を行った。日中両国の蚕神は関連性を持ちながらも、それぞれの独自性を見せていた。第2節では、日中両国の養蚕関係の年中行事について考察を行った。年中行事には多くの類似点が見られた。第3節では、日中の養蚕民俗芸能について考察を行った。日中の養蚕民俗芸能には各自の特徴はあるものの、二つの一致点が存在することが明らかになった。これらから、日中の養蚕民俗は一定の関連性を持ちながらも、文化、産業発展などの影響によって、それぞれの特徴を呈するようになったことが明らかになった。

第3章では、「博物館における養蚕文化伝承の取り組み」について論じた。第1節では、日本26施設と中国35施設を対象とし、日中養蚕関係博物館業務事情を比較分析した。第2節では、日中の養蚕関係博物館の教育普及活動の実施状況を考察し、教育普及活動の傾向を分析した。日中養蚕関係博物館

が蚕糸の生産地で開館し、館内常設展示や養蚕関連の各種展覧会・教育普及プログラムの定期的な実施により、養蚕技術や蚕に関する知識、養蚕業の歴史、関連民俗文化財などが人々の間に広まるようになったことが分かった。また、博物館による館外教育活動は養蚕文化の普及の場を学校や地域にまで広げ、こうした取り組みは日中両国の養蚕文化財保護と伝承に重要な役割を果たしていることが明らかになった。

第4章では、「養蚕関係文化財の保存と伝承」について論じた。第1節では、日中の文化財保護発展の歴史を比較分析した。第2節と第3節では、日中の養蚕関係の世界遺産および国、県(省)指定の無形民俗文化財に対して行った調査のもとに、養蚕関係文化財の伝承現状の一端を考察した。日中養蚕関係文化財の調査を通じて、両国ともに文化財保護と養蚕文化の伝承に多大な努力を払い、一定の成果を得ていることが分かった。

第5章では、「小学校における蚕の学習」について論じた。第1節では、一般財団法人大日本蚕糸会「蚕糸絹文化学習教育奨励褒賞」の24校表彰校の「功績概要」に基づいて、日本の小学校教育における養蚕文化の伝承の取り組みの一端を考察してきた。第2節では、2022年6月に、中国の四川省、広東省、山東省など7省の小学校10校の理科科教員、児童、保護者に対して行った蚕の学習活動に関するアンケート調査のもとに、中国における「蚕の学習活動」の実施状況と養蚕文化伝承への実質的な効果の一端を考察してきた。総じて、日中両国では小学校における蚕の学習が養蚕文化の伝承に大きな役割を果たしていることが分かった。

以上のように、日本と中国の養蚕文化の関連性及び保護と伝承の取り組みを考察してきた。これらの内容は、以下のようにまとめることができよう。

日中両国の養蚕業は上代からすでに密接な関係にあり、秦漢、唐宋、明清の時代を経て21世紀まで続いている。国や民間の頻繁な技術、文化交流により、両国の養蚕は相互に影響を及ぼし合ってきた。技術交流のみならず、養蚕文化においても両国は密接な関係にある。日本の東北地方のオシラサマ、馬鳴菩薩、長野県の嫫祖は中国の蚕神と関連性を持っている。養蚕民俗についても、小正

月の一部行事が中国の影響を受けているほか、養蚕関連の正月飾り、猫神信仰にも類似性が見られる。さらに養蚕業そのものの性格や特徴、栽桑養蚕労働や豊蚕への祈りから生まれた民謡、舞踏等の伝統芸能にも類似性がある。総体的に見て、日中両国の養蚕文化は決して独立したものではないと言える。そのため養蚕文化の保護と伝承については、自国内のみならず、積極的に相手国の経験を取り入れることが肝要である。

数十年の努力と実践を経て、両国は養蚕文化の保護と伝承において一定の成果を収め、貴重な経験を蓄積した。1950年代から日本は博物館の設立、文化財の指定、学校での教育等の方法で、消えゆく養蚕文化を保護してきた。中国は日本よりやや遅れて保護と伝承に乗り出した。中国国内では1990年代にようやく養蚕関係の専門博物館が設立された。2009年に「中国の養蚕・絹織物の職人技術」が世界に無形文化遺産として認定される前後になって初めて、国内で養蚕文化の保護と伝承が盛り上がりを見せた。保護と伝承の実践において、日中双方には数多くの類似点と各々の特色が存在する。

日本の博物館が常設展示、館内外の活動、出前授業等の方法で養蚕文化の普及を進めてきたことが明らかになった。しかし現段階では学校との連携の割合が低く、また対象が小学校に集中していることから、いかにして中高大学との連携を増やしていくかが今後の課題である。また日本の博物館ならびに民俗資料館、郷土資料館は統合が進んでおらず、博物館内の養蚕民俗の展示がやや少ないのも解決すべき問題である。中国では2009年を契機に養蚕民俗関係の専門博物館が増加し、嫫祖文化専門の博物館まで現れた。現時点における博物館の常設展、特別展および各種イベントの展開状況から見ると、中国は日本に比べて養蚕民俗の伝承推進に積極的であることが分かる。中国の養蚕関係博物館は主に江蘇省、浙江省、四川省の養蚕地域に集中しており、地域分布に偏りがある。さらに博物館の館外イベントも、概ね近隣の市区でのみ実施されている。そのほか、中国にも日本同様、小学校を中心に出前授業が行われているという課題が存在する。

有形文化財については、日本では「富岡製糸場と絹産業遺産群」のような養蚕関係建造物(群)が比較的良好な状態で保存され、大部分が一般公開されている。これは養蚕文化の伝承に非常に有利である。日本に比べ中国では歴史的な要因等もあり、養蚕関連建造物の保全状態は良好とは言えない。無形文化財については、日本は1950年代から養蚕関連の年中行事、芸能等を無形文化財に指定し保護してきた。文化庁、各県市町の教育委員会等の関係機関の積極的な取り組みにより、養蚕関連無形文化財の保護は比較的順調に進んでいる。しかし1990年代以降は全国的に養蚕業が衰退し、過疎化、少子高齢化が深刻になる中で、養蚕関連文化財の伝承も難しさを増している。中国でも日本同様、無形文化財伝承者の高齢化、民謡類の伝承の難しさといった課題が存在する。現在、中国国内では過疎化や少子化の問題はさほど顕著でなく、政府関係部門の強力な後押しを得て養蚕関係無形文化財の伝承は概ね順調に進んでいる。また学校との連携にも注力している。さらに日本が伝統的な内容や演出方法を重んじているのに対し、中国では現代人の審美眼や価値観に応えようとする傾向が見られる。現時点ではその試みは養蚕文化の普及に一定の積極的意義を有しており、日本における無形文化財伝承の参考になると思われる。

学校教育の領域では、日本は20世紀後半からすでに一部の学校で「蚕の学習活動」を展開している。また地域の養蚕農家、農協、博物館、製糸工場等との連携も重視している。こうした経験を中国も参考にすべきであろう。中国国内では2012年以降、小中学生向けに「伝統文化の学校への導入」を進めており、小学校では理科科の時間に「蚕の学習活動」を実施している。総合的に見て実施校が多く、教員や児童の学習意欲も高いことから、同活動は中国養蚕文化の伝承に積極的な意義を有していると言える。現段階では学校が養蚕農家、製糸企業、博物館と連携する例は稀で、児童の「蚕の学習活動」は概ね学校内に限定されている。また、次世代の養蚕文化伝承者の育成は非常に重要ではあるが、現時点では一般市民の間で養蚕文化を普及させることを重視すべきであろう。

そのため、日中両国は交流を強化し、積極的に相手方の有益な経験を取り入れ、協力し合い、文化フェアやセミナー、上演イベント等の共催することで養蚕文化交流を深化させねばならない。また日中の博物館連盟、移動博物館、オンライン博物館等の形式で養蚕文化の普及率向上を目指し、中高大学においても普及活動を展開して生徒や学生の認識に応じた「蚕の学習活動」に取り組む必要があるだろう。さらに日中の学生が養蚕伝承関連の訪問学習、短期交流、オンライン交流等の試みを行い、次世代が自国の養蚕文化を理解すると同時に、相手国の養蚕文化に触れる機会を与えることも求められる。こうした試みを通じて、数千年続いた日中の養蚕文化をさらに引き継いでいくのである。